

## インターネットとフェイス・ツウ・フェイス

オーストラリアのシドニーへ出張するに際して、江草基金からご援助をいただいた。この出張は、同地のマックオーリー大学が主催する日本経済研究国際会議（一九九六年八月）に参加するためのものであった。二日間にわたる会議には、日本、米国、オーストラリアから国際的に著名な研究者約三〇名（米国ミシガン大学のギャリー・サクソンハウス教授、スタンフォード大学のダニエル・オキモト教授、東大の河合正弘教授ほか）が出席した。筆者は、当会議の企画・運営委員の一人として第一日目に会議の議長を務めた。

ここで発表された論文のテーマは、日本経済の歴史的な位置づけ、安全保障と経済、対内外直接投資、系列、ハイテク技術政策、金融システム安定化政策など極めて広範にわたり、終始活発な議論が展開された。これらの論文は、会議での討議を踏まえて今後、拡張と改訂が行われることとなっており、いずれ国際的に知られた出版社から英文で出版される予定である。

このように、会議は国際的な研究交流と成果結集の上で、きわめて有意義なものであったが、今回は従来にない二つの感想を強く持った。一つは、この会議の企画に際し、筆者は海外との通信に従来のようなファックス通信ではなく、電子メールをフルに利用して格段に効率的な通信と参加者間の調整ができ、技術の進歩を身にしみて感じたことである。

いま一つには、インターネットが発達した現在の世界でも、直接顔を合わせて（フェイス・ツウ・フェイスで）会話をし、あるいは同じテーブルに就いて議論をすることの重要性は何ら後退していないことを改めて認識したことだ。旧知の研究者と再会する一方、内外に新たな研究者の知己を得ることは、今後の研究にとって大きな資産の形成を意味する。インターネットの発達、フェイス・ツウ・フェイスの会議を不要にするのではない。両者を相互補完的に利用することによって、研究効率の向上が図れるようになる。

研究者の海外出張を支援する江草基金の意義は、とても大きいと思う。

（社会科学国際交流江草基金「斐然一〇年--江草基金のあゆみ」、一九九七年六月）